

§ 1 3 江名子断層・今後の課題

平成12年度の調査の結果、江名子断層の内、大八賀川右岸の断層の平均変位速度の目安が得られた。

今後の課題としては、大きく2方向ある。

一つ目の課題は、江名子断層の内、後期更新世以降も活動的であるのはリニアメントFの大八賀川右岸の一部分だけであるのかという課題である。

リニアメントA～Eのように山中を延びており、新規堆積物の地形面が分布しない場所で、断層の活動性をどのように評価していくかが問題となる。また、リニアメントG～Iについては、新旧の崩落地形が発達しており断層変位地形が不明瞭となっている。地質的に崩落地形が発達し易い原因を有する地区での断層の活動性をどのように調査し、評価していくかが問題となる。

また、活動的な部分の総延長によって、発生する地震のマグニチュードの想定も異なることから、活断層（今後も地震を繰り返し発生する可能性のある断層）として扱う範囲をより正確に求める必要がある。

もう一つの課題は、江名子断層の活動性の評価である。今年度の調査で得られたのは平均変位速度だけにすぎない。

地震防災対策上に必要な基礎資料として重要な要素は、最終活動時期である。次いで単位変位量、地震再来間隔などが必要である。発生地震のマグニチュードを想定するには、地震断層の長さかもしくは単位変位量を得られれば定性的ではあるがある程度の目安が得られる。したがって、今後、江名子断層に関する活動性を評価するには、地震断層の総延長、最終活動時期、単位変位量、地震再来間隔などを得る必要がある。

上記の課題を満たすためには、山中の微細な変位地形の精密測量や尾根の鞍部でのピット掘削などを組み合わせて、さらに情報を集める必要がある。

平成10年度の調査結果によれば、江名子断層周辺には、江名子断層とほぼ平行な活断層が多く並走している。これらの内には、リニアメントとしては明瞭でも、山間地を通る部分が多く第四系の分布が乏しいため、詳細調査からはずれたものも多い。今後は江名子断層の調査結果と比較検討することによって、これらの並走する活断層の活動性も合わせて議論し、高山・大原断層帯全体の長期的な地震発生の可能性についての評価を行う必要がある。